

平成28年度対人援助研究ブランディング看護・医療福祉部門 超高齢社会における高齢者・認知症者の健康及び世代継承性・ 社会貢献活動に関する看護カフェモデルの構築 第Ⅰ編－高齢者カフェの実態調査報告－

広島文化学園大学看護学部・看護学研究科

河野 保子, 土肥 敏博, 加藤 重子, 讃井 真理, 森田 克也
大塚 文, 前信 由美, 岩本 由美, 田村 和恵, 佐藤 敦子
今坂 鈴江, 風間 栄子, 岡田 京子

キーワード：高齢者カフェ, 来んさいカフェ, 研究ブランディング事業

ショートタイトル：高齢者カフェ実態調査

■ はじめに

わが国の高齢化率は、平成27年度の国勢調査によれば26.7%（高齢者の人口推計：3384万人）で過去最高を示し、80歳以上は1002万人（総人口の7.9%）と初めて1千万人を超えた。年齢別では70歳以上2415万人（総人口の19.0%）、75歳以上は1637万人（総人口の12.9%）となっており、平成47年には高齢化率が33.4%と推計され高齢者は増加の一途を辿っている。高齢化社会は、平均寿命の延伸とともに健康寿命をいかに長く保つかという課題をも提起しており、高齢者が健康で生きがいをもち、高齢者の社会参加や貢献度が期待できるような社会の基盤形成が重要になる。特に呉市の高齢化率は32.6%と全国平均（26.7%）と比べても高齢者の多い地域である。また、呉市は坂の多い町でもあり、自分の足を丈夫に保ち健康長寿に生活できるかが老後の幸福感の重要な要件となる。

今日、高齢者の余暇活動や社会参加を促す様々なカフェが実施されており（余ら、2012）¹⁾、高齢者のQOLを高める活動が始まっている。進展する高齢化社会における高齢者の生活パターンを概観するとき社会参加も少なく、地域活動や余暇活動にも消極的で、自宅にいて消極的に生活を送る高齢者が16.2%いることも明らかになっている（河野ら、2014）²⁾。さらに、高齢者の世代継承性に関する研究では、讃井ら（2014）³⁾は友人交流や若者との交流が、自身の経験や知識等を他者につなげるという世代継承性を促し、またそのことが自己の健康感や自尊感情、自己効力感の形成につながり、孤独感の解消や生活満足感に繋がっていることを明らかにしている。

超高齢化社会は高齢者の幸せの保障と共に、多様な高齢者像の視点に立った高齢者の役割を再確認し、蓄積された経験や知恵等を社会に還元し社会貢献することが可能であると考えられる。高齢者カフェはこのような考えにおいて必要不可欠な事業である。このような観点から呉市では市民の健康増進のためにカフェ・サロンを含む各種事業を推進している⁴⁾。

他方、高齢化の進展は、要支援や要介護状態となる高齢者が増加することでもあり（内閣府：平成28年度版高齢社会白書）⁵⁾、さらには後期高齢者の増加と共に認知症者の増加も予測され、国の対策として様々な取組が行われている。中でも認知症対策はわが国の喫緊の課題とされているが、本件に関しては「第Ⅱ編－認知症カフェ実態調査報告－」で論述する。

以上、高齢者を対象とした様々なカフェが実践されているが、ほとんどの場合、実施主体者の経験知

中心であること、体系的なプログラムが少ないこと、カフェの有効性（エビデンス）に関する報告が見当たらないこと等、カフェの在り方に更なる検討が必要である。高齢者・認知症者カフェにおける対人援助研究を通して、一般化・普遍化できる看護カフェモデルの開発は、高齢化社会における重要な位置づけにあるため本研究を着想した。

本研究“超高齢社会における高齢者・認知症者の健康及び世代継承性・社会貢献活動に関する看護カフェモデルの構築”は、文部科学省平成28年度「私立大学研究ブランディング事業」タイプAに採択（2016年11月24日）された広島文化学園大学の「地域共生のための対人援助システムの構築」の事業の一環として実施するものである。事業の概要は、“支援を必要とする子ども、障害児・者、高齢・認知症者が健康に暮らす共生社会の実現のために、HBG対人援助研究センターを核として、集いの場となる「来んさいカフェ」を提供する。看護・医療福祉部門、スポーツ・健康福祉部門、子ども子育て・教育福祉部門の3研究部門から、「カフェ」における対人援助プログラムと持続可能な地域支援サポーター養成プログラムの開発と検証を行い、本事業が地域の活性化に結びつくことを実証する。”としている（図I-1）（広島文化学園大学ホームページに詳述されている。<http://www.hbg.ac.jp/info/branding.html>）。なお、本研究の実施に当たっては看護総合研究センターの支援を得た。

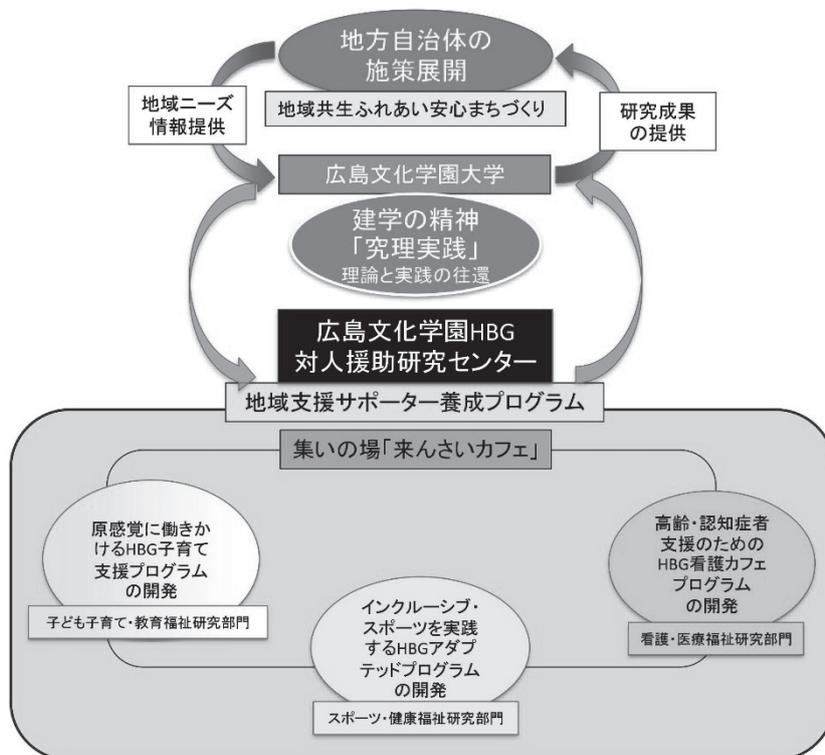


図 I - 1 地域共生のための対人援助システムの構築

■ 研究目的

本研究は、集いの場となる高齢者カフェを提供することにより、高齢者の身体機能が異世代交流を通して生活の活性化やQOLの向上につながることを明らかにする。また、高齢者の健康調査を各種指標から分析し、エクササイズの実施により、身体活動が高齢者の健康増進や疾病予防（認知症予防を含む）とどのような関係にあるかを明らかにする。

これらのことから得られる科学的エビデンスを踏まえて、高齢者カフェの介入プログラムを開発し、一般化・普遍化できる看護カフェモデルを構築する（図I-2）。

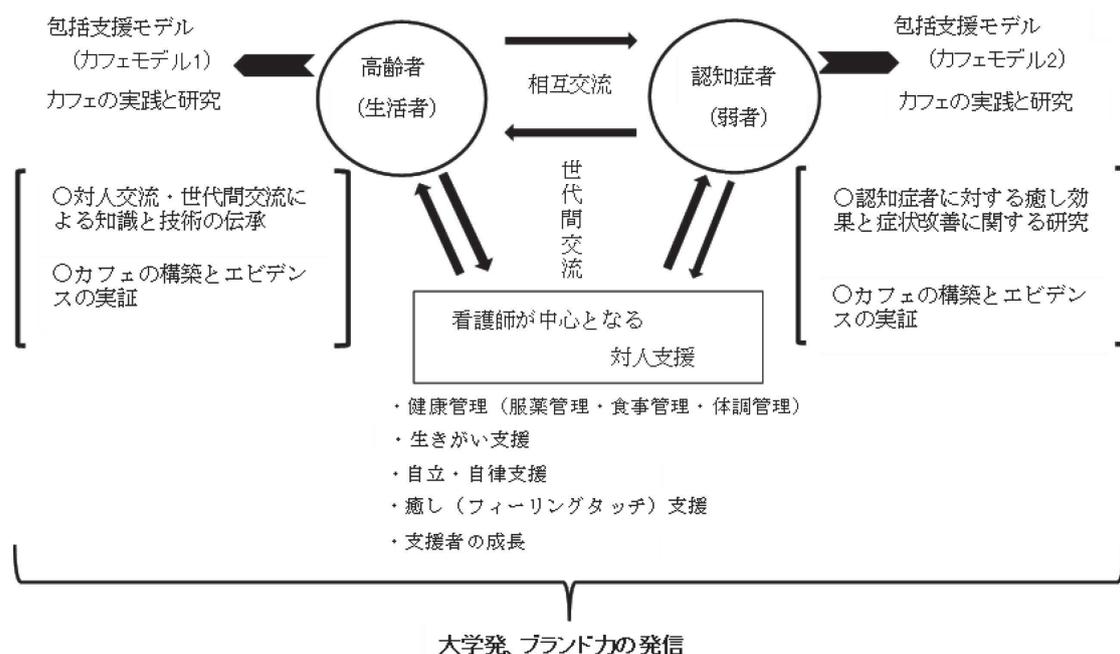


図 I-2

本目的のために、第I編では、高齢者カフェについて現在開設されているカフェの実態調査を行い、現状を分析し、看護・高齢者カフェ展開に資する。

■ 方法

平成28年度の実施計画に基づき、呉市に開設している高齢者カフェおよび広島市や他府県で開設されている特徴的なカフェの実態調査（文献含む）を行い、情報を収集した。調査項目表は、認知症カフェのあり方と運営に関する調査研究事業 報告書（2013）⁷⁾を参考に本学が実施する観点からの調査項目を加えたものを作成し、聞き取り調査を行った。カフェ開設に必要な条件（運営母体、実施されているイベント、参加者への波及効果など）に加え、特にどのようなカフェを開設すれば、大学カフェとしての特徴が出せるのか、既存のカフェとの差別化をどこに求めるのかという視点を考慮した。

■ 結果

高齢者向けのカフェは、「サロン」とか「コミュニティ・カフェ」と呼ばれている。これらには、市町村や社会福祉協議会の事業として、公共施設などで実施されているサロンや、市町村等の助成や委託を受けて住民組織などが公民館や集会所、個人宅などで実施しているサロン、NPO法人や個人などが独自に実施している居場所もある。空き店舗を改修したりするところもあり、呉地区にはこうした空家も多く散見され、活用できれば空家対策ともなる。

地域包括ケアシステムの構築と推進を命題として生活支援システムの一環として企画されている呉市社会福祉協議会は、「ご近所からほほえみ返しが広がるまちづくり」「可能な限り住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるまちづくり」に寄与することを基本理念としている。この呉市社会福祉協議会では、平成28年度事業計画で地域包括ケアシステムにおける生活支援への取り組み強化を重点目標の一番に挙げて様々な取り組みがなされている⁶⁾。その目標達成の一つとして、既存の5か所のお茶の間サロン（川原石・川尻・宮原・第6地区・天応）に次いで、2か所を立ち上げる予定としている。

1. 呉市内高齢者カフェ訪問調査

宮原地区は、呉市の18市域の中の一つで、人口7500人、4000世帯（9月現在）で、高齢化率が約37%と高く、一人暮らしの高齢者が多い地域でもある。呉市社会福祉協議会と広島県社会福祉協議会とが運営母体となる「宮原お茶の間サロン きらく亭」は、ほかの地区に先駆けて開設されたお茶の間サロンである。きらく亭では高齢者のふれ合い・交流を通して、イキイキと楽しく過ごせる場を提供することにより、高齢者の活動、お出かけの機会を増やすこと、また、そのことによって、生きがいや仲間づくり、お茶の間に日常的な声掛け、見守り、悩み相談、世代間交流を通して地域で支え合うことを目的として活動が行われている。

実施内容は、お茶を飲みながら楽しく会話を楽しんだり、日々の困りごとなどの相談に応じる。必要であれば関係機関につなぐこともしている。スタッフに栄養士がおり、栄養相談も行っている。ポイント制を導入して次に来る楽しみにつなげるなど、利用しやすい工夫も取り入れている（表I-1）。表中、小学生との繋がり（世代間交流）で世代性が発揮できる、との意見があり、本学学生を参加させることにより世代継承性が培われるという確信を得た。また、スタッフのメンタルサポートも必要か、との意見もみられ、看護師が主導する本学カフェの特性が本件においても活かせるものと思われる。

呉市社会福祉協議会は、これらのお茶の間サロンの活動を強化し、地域の問題解決の場となるための支援を行っている。「オール呉ささえあいネット」を拠点として機能強化、「ふれあい・いきいきサロン」の活動推進、新たな「ふれあい・いきいきサロン」の立ち上げ支援、サロンだより「笑顔の“わ”」の発行、サロンマップの更新、サロン世話人会の組織化・活動強化、「くれ福祉のまちづくりのつどい」開催、「ふれあい・いきいきサロン助成金交付要綱」の検討、「小さな親切」運動呉支部と地域福祉活動との連携、サロン世話人向けサロンのネタづくり支援（ひよこ塾）の内容充実、すこやかサロンの実施、ふれあい・いきいきサロンの生活支援拠点として活動の強化、地域に根ざしたボランティア活動の推進である。さらに、くれ市民協働センター等ボランティア関係機関との連携強化、地域での生活支援サービスの担い手確保のための人材育成、生活支援コーディネーターとの協働実施、「ボランティア養成講座」の開催なども行って、お茶の間カフェとともに地域を包括する支援・ケアの構築を推進している。

2. 文献検討

CiNii データベースを用いて、キーワードを「コミュニティカフェ」として、過去3年間（2013年～2017年3月）の先行研究を抽出した結果、41件を抽出した（表I-2に概要を掲載）。毎年10件～11件が報告されている。2014年までは開設時、あるいは開設後の状況報告が中心であるが、2015年からは研究的な取り組みも散見されるようになっていた。カフェの実施内容は、前述の余ら¹⁾の報告と大きな違いはなく、収益となる飲食の提供、趣味、健康維持・介護予防、異世代との交流、および専門職者による相談などが中心であった。カフェの効果について、余らの認知症に限定されたカフェの報告と異なる点は、目的とする対象が多様である点にある。しかし、いずれの対象であっても、その対象らにとって、カフェは居場所として重要な意味を持っていること、対象本人だけでなく、来訪する他者、あるいは支援する側への波及的影響は大きいことが報告されている。認知症カフェの特徴は、介護保険のサービスにはない「家族とともに利用が可能である」点にあるが、今回、調べた範囲では、コミュニティカフェにおいては、家族と一緒に利用という内容はあまり見られなかった。また、財政面、そして人材確保について、多くの対象論文に課題として挙げられていた。持続的に運営していくために必要なことは、収益につながる何らかの方策が必要であること、人材の育成とともに、スタッフが無理することなく継続できる設置にすることであろう。また、利用しやすい建築学的な、社会心理的な工夫も必要である。コミュニティカフェの要素7つは、①好きなことができる時間と空間の提供、②適度のストレスのある人との距離感が保てるスペースである、③飲食できて時間を気にしないでいられるスペース、④社会貢献的活動ができる、⑤多世代と多様性を大切にす、⑥いろんな企業・団体を無理なく巻き込む、⑦情報が集まってくる場にする（なる？）といったところであろうか。

表 I - 1 高齢者カフェ調査結果

調査日 平成28年12月2日(金) 13:30~14:50

訪問者 河野保子・讀井真理・岡田京子

項目	実施状況
カフェの名称	宮原お茶の間サロン きらく亭
所在地	広島県呉市宮原7丁目4-21 宮原まちづくりセンター2階(和室126平米)
対応者	香川治子様(宮原地区社会福祉協議会会長) 藤本貴美様(代表) 湯川和子様 他ボランティアスタッフ5名(湯川先生は本学非常勤講師・ソフト食の調理実習でお世話になっている=偶然お会いした=写真の一番右)
運営母体	1. 家族など 2. 社会福祉法人 3. 町村 4. NPO法人 5. 診療施設 6. その他(広島県社会福祉協議会と呉市社会福祉協議会)
運営費用	年間 約58万円(県社会福祉協議会・市社会福祉協議会から3年間) 施設使用料・光熱費はまちづくりセンターの負担(和室10畳と20畳と流し)
資金源	1. 自己資金 2. 参加費 3. 財団などの助成金 4. その他()
カフェの場所	1. 個人の家 2. 公民館などの公共施設(まちづくりセンター) 3. 病院付属施設 4. その他()
カフェの目的	宮原地区は高齢化率、約37%と高く、一人暮らしの高齢者が多い。地域での、高齢者のふれ合い、交流を通して、イキイキと楽しく過ごせる場は、高齢者の活動、お出かけの機会を増やすこととなり、生きがいや仲間づくりとなる。また、お茶の間で日常的な声掛け、見守り、悩み相談、世代間交流を通して地域で支え合うなどを目的としている。
開催頻度	1. 週2回(火・金) 2. 月回 3. 年回 4. その他()
開催時間	1. 10時~15時 2. スタッフは2交代(AM3名とPM3名で交代)、ボランティアは述べ15名
食事	1. 持参 2. 施設が提供 3. その他(食事なし、持参してもよい)
参加費	1. 無料 但し、飲み物代: コーヒー・紅茶は100円、抹茶200円 2. 1人回 円
参加者	人数: 1日約10人。男性参加者無し
ADL	1. 家にこもっている 2. 散歩に出かける 3. 買い物に行く 4. ボランティア活動をする 5. その他(訪問中の来訪者2名は徒歩だった)
交通手段	1. 自分で 2. 家族に運ばれて 3. 施設の送迎バスなど 4. その他(センターのイベントの帰りに立ち寄る等)
スタッフ	1. 家族メンバー 2. 市民ボランティア 3. 認知症サポーター 4. 専門職(看護師、介護士、作業療法士、医師など) 5. その他(ボランティア、宮原地区社会福祉協議会会長香川治子様)
ネットワーク	1. 社協 2. 地域包括支援センター 3. 医師会 4. 民生委員 5. 老人会 6. その他(各種会議・研修等) 民生委員とネットワークを作りたい
実施内容	お茶を飲みながら楽しく会話を楽しんだり、日々の困りごとなどの相談に応じる。必要であれば関係機関につなぐこともしている。スタッフに栄養士がおり、栄養相談も行う。ポイント制導入で10回来たら1回コーヒーが無料になるポイントカードを配布。
効果・課題など	【効果】 安心サポートリーダーが当番制でサポートし、利用者からは、「イライラすることがなくなった」「サポーターの人たちの笑顔に癒される」「夫婦の会話が増えた」「お茶を飲みながらのおしゃべりは楽しい」などの声が聴かれ、人ひとりの繋がりの場となっている。地域との繋がりがなかったが、利用することで繋がりがもてるようになった。皆で助け合える。小学生とのつながり(世代間交流)で世代性が発揮できる。 代表は研究会等に参加して情報を交換しながら実践に活かしている。 スタッフも将来的に利用者となりうるため、そのための地域づくりと居場所づくり。 それぞれの特技が生かせる場(本日はクリスマスの飾りがされた)、昔の足踏みミシンがあったり、囲碁などができるようにしている。センター内はエレベーターもあり、階段の段差が低い。 【課題】 女性が多く男性が少ない 地域の人間関係はそのまま引き継がれるので要配慮 本年度で社協の助成がなくなるため、今後は自力で行う 広報は課題、知っていただくためにはイベントも必要 宮原は地域的に縦長の町であるため、センターから遠い人は利用しにくい
高齢者のカフェの必要性などについて	【必要性】 高齢者の集いの場所はたくさんあった方がよい 医療費の前減になる 家庭と地域との結びつきになる
看護学部が設置・運営することの特長・意義などについて	阿賀駅の近くがよいのではないかと 〇〇先生はボランティアで本学の事業に参加して下さるとのこと 大学で開くとやや入りにくいかも 常設だと備品を置けるけど、そうでないと運搬が大変
その他	【訪問者の気づき】 ・地域の協力が重要 ・男性が来やすいカフェとは何か ・お抹茶っていいな ・一階にあった方がよいかも ・駐車場があるとよい ・座って落ち着ける雰囲気 ・いろいろな職種経験を持つ人に参加していただいで経験を活かしていただくとよい ・多様性のあるイベント ・いつも同じ話の繰り返しを聞くスタッフのメンタルサポートも必要か? ・会議や研修会で他のカフェとの情報共有は重要 ・何となく利用したくなるようなルートにつくる必要があるかも

宮原地区: 人口7500、4000世帯(9月現在) 高齢者率36%、18地区に分けている市域の中の1つ。

表 I-2 CiNii データベースによる過去3年間のコミュニティカフェに関する文献一覧 (2017.03.27)

著者	テーマ	発表年	巻号	内容
1	いきいきチャレンジ 東京都杉並区・社会福祉法人 浴風会 都市型認知症コミュニティカフェを通して、認知症の人や介護家族の支援を実現	WAM : welfare and medical service (624), 16-19, 2016		
2	交流集会 コミュニティカフェ・認知症カフェ (特集 第 29 回日本看護福祉学会学術大会報告)	日本看護福祉学会誌 22(1), 36-43, 2016.		
3	コミュニティ・カフェにおけるソーシャル・ビジネスの苗床としての可能性 (小さなまちの挑戦：地方創生とまちづくり)	地域活性学会研究会大会論文集 8, 368-371, 2016.		コミュニティカフェがソーシャル・ビジネスの苗床として、どのように機能しているか、また今後、どのような機能すべきかを検討している。地域での起業に向けた支援を行っていること、地域内外からの声に添えていくことが必要。さらに今後はカフェ以外の複数の事業展開で収益を確保し、運営の安定化を図ること、地域資源を活用し既存の取り組みの継続と新たな取り組みへの発展が必要である。
4	リアルとネットを組み合わせた地域・大学連携の研究 (小さなまちの挑戦：地方創生とまちづくり)	地域活性学会研究会大会論文集 8, 48-51, 2016.		カフェの取り組みはアナログとネット空間においてどのようにリアルな行動を生み出し、リアルな行動を促進している。地域・大学連携での取り組みがアナログでリアルな拠点としてのカフェと、そこでの内容のネット発信によって、地域のブランドが作られる。
5	都市空間におけるメディア接触行動・コミュニティカフェにおけるチラシ閲覧行動を手掛かりに	情報処理センター年報 18, 75-88, 2016.		地域ネットワークが充実していることと、地域活動に積極的に取り組んでいることは、メディア接触行動に結びついていた。都市の現実空間におけるメディア接触はそうした移動傾向の高い人々の行動を支える。
6	地域連携を目指した食育交流「食育カフェ」の試み：プログラムの開発と今後の課題	大妻女子大学家政系研究紀要 (52), 69-76, 2016		高齢者と子どもとの食交流を目的とした活動の成果を検討している。精神的な安らぎの場となる可能性と、高齢者から子供への地域の文化が伝えられる場として有効である。
7	保健医療福祉専門職のコミュニティ・カフェ活動の展開と課題	北海道生命倫理研究 4, 28-32, 2016		保健医療福祉型コミュニティカフェ活動について、その機能、役割と展望・課題を検討している。保健医療福祉型カフェは、補完的ケア・相談機能、医療機関でカバーできないケア、情報提供、意思決定の相談プロセッサが行われる。教育・学習機能がある。地域住民のネットワーク化の機能を有する。課題は計算性・専門職と住民の間の情報の非対称性、健康等に関心がない人を地域から排除することにつながる可能性がある。
8	コミュニティカフェとパーソナル・ネットワーク：利用者を対象とする質問紙調査データの分析	帝京社会学 (29), 113-143, 2016		コミュニティカフェ利用をきっかけとして新たな人間関係の形成は、先行研究が強調するほど広がっていない。新たに発生したネットワークは対外的にさほど拡大しない、コミュニティカフェ利用を媒介した人間関係が広がる要因はイベント種類数などに限定されている。
9	商店街の空き店舗を活用した「子ども居場所づくり」事業についての考察	藤女子大学 QOL 研究所紀要 11(1), 25-33, 2016		商店街振興組合と大学生・NPO 法人などが取り組んできたカフェの子どもの居場所づくり事業の活動の意義と役割を検討している。支援者や地域住民との間に信頼関係が構築され、商店街からの人的及び経済的サポートがあることが持続可能性を安定化させる。
10	地域の人々が元気になる居場所の拠点づくりの可能性：認定 NPO 法人じやんけんぼんの実践にみるコミュニティ・カフェと配食サービスの併設	桜美林論考、自然科学・総合科学研究 (7), 73-94, 2016		じやんけんぼんは一般のコミュニティカフェとの共通点は、集客しやすい場所、お互い干渉せず活動できる場、カフェの機能、思い思いに過ごせる、何時間でもいれることにある。独自の展開として、趣味創作活動、高齢者や子ども保護者の居場所づくりとして、人々の関心を引くこと、つながりをリードするコーディネーターの存在であること、一人一人に向き合うこと、趣味・イベント・健康関連活動がバランスよく配置されていること、他者貢献プログラム、個別ニーズをイベントへ発展させる、若い母親の心をつかむ、子ども居場所、福祉機能、情報ハブ機能、人材を育てる機能、見守り目的の配食サービスである。

著者	テーマ	発表年	巻号	内容
11 島岡昌代 山崎尚美 南都登志江 他	認知症カフェに関する実践報告	2015	12(2), 53-57, 2015.	大学と市との連携で展開してきたカフェの継続に向けての課題を検討。
12 東野定律 藤本健太郎	地域社会における居場所の実態とそのあり方に関する研究	2015	経営と情報：静岡県立大学・経営情報学部研究紀要 28(1), 13-30, 2015	静岡県内4か所の常設型居場所を利用して242名のアンケート。悩み事を相談する場所として利用していた。地域の関連機関と連携して利用者の生活をサポートするサービスネットの窓口として機能すること求められると報告。
13 野口菜々子 川島和彦	コミュニティカフェにおける地域交流の促進のための活動に関する研究：埼玉県和光市アルコイリスカフェを対象にして(都市計画)	2015	日本建築学会関東支部研究報告集 85(II), 405-408, 2015.	文献とヒアリング調査によって、地域交流を促進する活動への役割を検討している。活動で出会うことによって、さらに別の活動への関心が生じるというプロセスを検証し、今後の関心を次の交流へつなぐ役割が必要である。
14 中村智彦	自主投稿論文「コミュニティカフェの経営実態とその課題」	2015	兵庫自治学 21), 89-95, 2015.	関東地区のカフェの運営者への調査。多彩なイベントが開催されていること、立ち寄るきっかけの提供、情報交換、人間関係形成、居場所提供といった効果があったことから、人の流れの胴体化と結節化に着目する側面がある。
15 田所承己	コミュニティカフェにおけるイベント活動に関する研究：運営に関する質問紙調査の分析を通して	2015	帝京社会学 28), 103-125, 2015	関東地区のカフェの運営者への調査。多彩なイベントが開催されていること、立ち寄るきっかけの提供、情報交換、人間関係形成、居場所提供といった効果があったことから、人の流れの胴体化と結節化に着目する側面がある。
16 中村友亮 小松 尚	「カフェ」を併設した障がい者のデザイン・ビジネスセンターに関する研究：地域住民の商品購買・滞在を意図した小規模生活介護事業所の活動経緯と利用実態	2015	日本建築学会東海支部研究報告集(53), 385-388, 2015	障がい者のデザインサービスにおける併設カフェの位置づけと障がい者の活動拠点作りの際の空間的・運営的要件を検討している。障がい者の訓練・成長の場、スタッフが来訪者をもてなすための場として、これまでの成果物を陳列することによって地域住民への理解につながる。活動を知らない人に来訪してもらう工夫が必要。
17 菅原浩信	商店街組織によるコミュニティ・カフェのマネジメント	2015	地域活性研究 6, 126-135, 2015	カフェにおける理学療法士の役割について検討している。介護予防の役割を担う。生きがいづくりが強調されている。今後は地域高齢者への運動指導や評価だけでなく、行政と連携して地域課題の連携に向けた働きかけが重要。
18 高取克彦 松本大輔 西田宗幹他	奈良県健康長寿共同事業を通じて市町村介護予防事業へのアプローチと地域包括ケアシステム構築に向けての先進的取り組み	2015	理学療法 Supplement 2014(0), 1238, 2015	ホームレス支援でカフェを開催する生活保護施設に注目して、施設退所者と地域の共同農作業プロジェクトについて検討している。結果、世俗的な関係が構築され、支援関係の継続と崩壊について検討している。
19 堀江尚子 渥美公秀 水内俊雄	施設のアフターケアでのアクシオンリサーチおよび支援関係の理論的考査	2015	実験社会心理学研究 55(1), 1-17, 2015	ホームレス支援でカフェを開催する生活保護施設に注目して、施設退所者と地域の共同農作業プロジェクトについて検討している。結果、世俗的な関係が構築され、支援関係の継続と崩壊について検討している。
20 小林重人 山田広明	サードプレイスにおける経験がもたらす地域愛着と協力意向の形成	2015	地域活性研究 6, 1-10, 2015	非常設型カフェの利用者へのアンケート。地域外へ居住する利用者の協力意向の形成には、地域の魅力となるメニューの提供と知らない他者とのコミュニケーションが寄与する。この二つの肯定的評価と地域愛着の経験が効果的。
21 大橋寿美子 加藤仁美	郊外戸建住宅地における地域住民と大学生による高齢者の居場所の形成(その2)伊勢原市愛甲原住宅での壁面アート制作を通じて	2015	湘北紀要(36), 1-11, 2015	伊勢原市の高齢者の居場所づくりとして開設されているカフェの取り組みを報告。活動の見え方の見える化、地域の方々と共同による活動をテーマとして、壁面アート、ミニマルを育てようという活動とともにコミュニティカフェに取り組んだ。
22 能勢摩耶 中田 弾 八藤後猛他	コミュニティカフェの利用実態 地域福祉活動拠点の施設機能及び利用実態に関する研究 その2	2014	学術講演梗概集 2014(建築計画), 443-444, 2014	カフェの建築の空間要素やしつらえを調査し、活動内容や提供サービスや客相互の関係性を比較分類し、カフェに必要な機能・役割を検討した。運営目的ごとでサービスと空間機能に特徴が認められている。
23 能勢摩耶 豊澤杏美 八藤後猛他	コミュニティカフェの全国運営実態 地域福祉活動拠点の施設機能及び利用実態に関する研究 その1	2014	学術講演梗概集 2014(建築計画), 441-442, 2014	カフェの建築の空間要素やしつらえを調査し、活動内容や提供サービスや客相互の関係性を比較分類し、カフェに必要な機能・役割を検討した。運営目的ごとでサービスと空間機能に特徴が認められている。
24 生越美咲 森 傑	5007 大船渡市末崎町「ハネウエル居場所ハウス」の設計意図と使いこなしの比較：東	2014	2014年度日本建築学会大会(近畿)学術	東日本大震災で被災した大船渡市の多世代交流の場として作られたカフェの設計意図と対する使いこなしについて検討している。程よい距離感で他社のかかわりと自分

	著者	テーマ	発表年	巻号	内容
	野村理恵	日本大震災被災地域の環境移行を支えるコミュニティカフェに関する研究	講演会・建築デザイン発表会)		の居場所を選択している。利用者は活動状況によって、屋内外を使いこなしている。キッチンと土間の連続性により生まれた交流場が他社と程よい距離感を生んでいる。
25	菅原浩信	商店街組織によるコミュニティ・カフェのマネジメント	地域活性化学会研究大会論文集 6, 196-199, 2014		
26	生越美咲 森 傑 野村理恵	73 大船渡市末崎町「ハネウエ」居場所ハウスの設計意図と使いこなしの比較：東日本大震災被災地域の環境移行を支えるコミュニティカフェに関する研究	日本建築学会北海道支部研究報告集(87), 301-304, 2014.		東日本大震災後に開設されたカフェの設計意図と地域への定着家庭、及び課題を報告している。3 か月間での地域の利用者の使いこなしに変化が見られた。建築内外の教会の意識が和らいでおり、また利用者が身を置く場所の選択の余地が広がっていた。
27	太田華奈	個の回復としての「笑い」：「抱樸館福岡」におけるコミュニティカフェ実践から	飛梅論集 14, 35-51, 2014		生活困窮者のこの回復の過程における笑いが有する文化的意味を検討している。さんぼみちは、生活の中で身に着けてきた生のスタイルと安心感の希求との間で葛藤する過程を示していた。また自分と向け合う時間と空間を保証していた。生を取り戻したことによる生きる喜びの共有と個と個の連帯の継続への希求という文化的意味を有している。
28		認知症の人とその家族を支えるカフェ：京都府社会福祉法人同和園 コミュニティカフェ工房「心のぼっこ」(人と人をつなぐ実践)	月刊福祉 97(4), 74-77, 2014		
29	寛 政憲 小松 尚	外国人居住者の支援拠点に備えられるべき要件：公共住宅団地に開設されたコミュニティ・カフェの「場の許容性」	日本建築学会東海支部研究報告集, (52), 505-508, 2014.		外国人集住の公共住宅団地での支援拠点の在り方について検討している。日本人の来評も視野に入れた雰囲気づくりによって、外国人居住者への生活支援だけでなく、日本住民とのインフォーマルな交流を生み出した。
30	菅原浩信	NPO における商店街組織との連携のあり方：コミュニティ・カフェの運営を事例として	日本経営診断学会論集 14(0), 52-57, 2014		商店街組織と連携していくために何をすべきかを検討し、組織間コラボレーションにおけるカギとなる要素が必要で、そのために商店街組織とのコミュニケーションの場をつくる、双方が波及効果を得られる仕組み、商店街組織のトップマネジメントへの働きかけが重要。
31	浜田麻里奈 後藤 春彦 山村 崇	テーマ型カフェを媒介とする地域活動ネットワークの展開に関する研究：国分寺市カフェスローとその関連団体が関わる地域イベント活動に着目して	都市計画論文集 49(3), 783-788, 2014		持続可能な地域活動における役割とそのメカニズムを検討している。結果、地域内外の接点としての役割を担うことで、地域全体を巻き込んだ活動を展開していくというメカニズムであった。
32	須藤 順	社会的企業におけるネットワークの形成と展開：企業組合で「ソーシャルサーチャーズ」に着目して	ノンプロフィット・レビュー：日本 NPO 学会機関誌 13(2), 59-68, 2013		社会的企業のネットワークに焦点を当て、ネットワーク・レント(利得)という概念を導入し、その形式と展開の実態から、効果的なマネジメントについて検討している。ネットワーキング・レントが事業の継続に寄与する。埋め込みのレントが他のレントを創出する基盤となる。企業はレントを享受するだけでなく、ネットワーク参加者がレントを享受できるような配分が必要。中間支援機関によるサービスの有効性、小さな成功体験の積み重ねを重要視。
33		水辺に根ざしたコミュニティカフェをつくる(特集 水辺とまちのソーシャルデザイン)の推進)タリーズコーヒー・ジャパン株式会社の視角：福島県(10)行政界を超えるネットワーキングの形成：コミュニティカフェから「さうま未来づくりミレーティング」へ	河川 69(12), 13-16, 2013		
34	齊藤 康則	地域再生の現場を行く(第 177 回)人気根強いコミュニティカフェ。住民が集う地域のたまり場(岐阜県多治見市、ママズカフェ)	Juntos : 地域生活応援誌 74, 43-45, 2013		
35	竹本 昌史	FC 本部訪問(Approach:1)地域社会に根ざした「コミュニティカフェ」を目指す!	経済界 48(17), 84-85, 2013		
36			Franchise age 42(5), 2-5, 2013		

	著者	テーマ	発表年	巻号	内容
37	永岡 沙樹, 藤沢 直樹, 藤岡 泰寛, 他	リーズコーヒージャパン株式会社 5612 建替え期間中の UR 賃貸団地での大 学支援型コミュニティカフェにおける住民 ネットワークの広がり : 団地再生にかか わる研究 その10	2013 年度日本建築 学会大会(北海道)学 術講演会学術講演梗 概集 2013(建築計 画), 1247-1248, 2013		大学支援によるカフェ活動が建て替え期間中の団地住民等に与えたコミュニティ再生 にかかわる有効性について検討した。第三者である大学が企画運営することで、参加 した住民がハブ化して、新たなネットワークを拡大する傾向を示した。
38	菅原 浩信	北海道開発協会平成 23 年度研究助成サ マリイ 北海道におけるコミュニティ・カフ ェのマネジメント	開 発 こ う ぼ う (598), 43-47, 2013		札幌市内を中心としたコミュニティ・カフェについて、「どのような」役割を果たしている のか、今後、コミュニティ・カフェは「どのような」役割を果たしていくべきか、また、そ のためには、「どのような」存続を図っていくべきかを検討している。
39	工藤 順	社会的企業によるネットワークの構築と活 用 : 高校生レストランまごの店とコミュニ ティカフェで、それぞれの事例から コミュニティ・カフェによる地域コミュニ ティの活性化	Venture review (21), 81-86, 2013		青森県で活動するコミュニティカフェの事例を通して、地域社会において社会的企業 の果たす役割とその可能性を検討している。結果、ソーシャルキャピタルの醸成主体、 地域住民の主体性の向上、地域経済への貢献という点が考えられたとした。
40	菅原 浩信		日本フードサービ ス 学 会 年 報 (18), 38-52, 2013		
41	佐々木 佳 五十嵐 聡子 永谷 基 他	コミュニティカフェの実態と可能性: 市民 の力はいかに地域を変えるのか	金沢大学学長研究奨 励費研究成果論文集 8(23), 32-36, 2012.		石川県内で開設されたカフェが従来では解決困難な課題を打開できると報告。利用 者側の視点に立った分析を試みている。急速な社会の変化等はあるが、多様性、柔軟 性、地域密着の運営特性が、困難な課題を解決しうる。
42	余 錦芳 松本 真澄 上野 淳	多摩ニュータウン高齢者支援スペース・福 祉亭の活動と利用の実態について : 多摩 ニュータウンの高齢者支援スペースと利用 者の地域生活様態に関する研究(その1)	日本建築学会計画系 論 文 集 77(67D), 9-18, 2012.		東京西部 4 市にまたがる多摩 NT の福祉亭が地域社会からどのように使いなされて いるか、地域にとつてどのような意味を持つかを検討している。結果、日常生活支援 活動も行う、6 割が顔なじみの関係、スタッフの個性と多様性が魅力である、日常生 活の居場所として機能している、との報告である。
43	倉持 香苗	居住福祉評論 居住福祉資源としての地域 内空き物件を活用した交流の場の創出 : コミュニティカフェ運営の事例から	居住福祉研究 (13), 81-87, 2012		
44	工藤 明美	看護の原点に戻り"看護の力"を発揮する めざせ!開業ナース(第 18 回)高齢者の"居場 所"となるコミュニティカフェを運営して	Community care 14(4), 38-41, 2012-04		
45	宇都宮千穂	地域における孤立化を防ぐつながりづく り : コミュニティ・カフェを中心に (特集 愛媛の地域政策・地域づくりへの提言)	ECPR : Ehime Center for Policy Research 2012(2), 9-13, 2012		

■ 考察

1. 効果と問題点の集約

高齢者カフェでは、基本的にはお茶を飲みながらおしゃべりをし、イベントを楽しんだり、参加したりして楽しく過ごすことにある。最大の効果は、家を出ることにより引きこもりやうつなどの精神的抑制の改善、会話を通して仲間作りなどで、高齢者の居場所をつくることで高齢者の孤立防止や介護予防に繋がる。このために歌や手芸、料理作りなど様々なイベントが行われている。また、参加者がイベントを企画したり、食べ物を持ち寄ったり、自分の持てる特技を提供するなどにより自分の役割を持つことで社会参加・貢献などによる生きがい感を達成することは極めて効果的である。また、体操やゲーム、スポーツなどを通して健康作りに役立つ。多くの高齢者カフェ（サロンなど）ではこのような取り組みが行われている。結果的に精神面、肉体面の健康保持・増進に役立ち、その一つに認知症予防効果も上げられる。

前述のような事業内容は、本学部での取り組みに非常に参考となり、また連携できるところは連携していきたい。これらを参考に本学部が実施する上で、以下のようなことが検討課題として考えられる（表I-3）

喫緊の課題は、どこで開設するかという場所の問題である。平成28年度私立大学教育研究活性化設備事業タイプ2では、阿賀地区住民22名を対象に、阿賀キャンパス図書館4階オープンコモンズ・スペース、およびセミナー室で、「活動量で病気を予防!？」という健康講座と、健康調査と健康相談が行われている。看護・高齢者カフェも大学キャンパス・オープンコモンズ・スペースを活用するのも一法であるが、4階までの階段を上る必要があるため、高齢者にはこの点が問題となる。呉市の空家を借りる、自治体の会館、市民会館などの利用、あるいはマンションなどへの出張カフェなどが検討課題である。いずれにしても人集めの広報、スタッフの確保など課題は多い。高齢者カフェ、サロンやコミュニティカフェの実態調査からも、その有効性と同時に持続可能なありかたについて様々な課題があることも見えてきた。地域と密着し、その資源を有効活用することが前提となるが、集客には多彩なイベントを実施する必要がある。そのためには、経済的資源とマンパワーが必要となる。高齢者カフェは大学施設を利用した地域密着型が望まれるが、継続性を持たせるには上記の課題を克服する必要がある。

2. 看護・高齢者カフェの目標

高齢者カフェの最大の効果は、家を出ることにより引きこもりやうつなどの精神的抑制の改善、会話を通してふれ合い、仲間作り、専門家への相談などにより一人で生活することの不安の解消、またフィジカルエクササイズによる健康増進などがある。もっと積極的な意味合いでは、社会活動への参加で自分の役割を持つことと社会貢献などによる生きがい、自己効力の達成感の助長などがある。ここでは参加者がイベントを企画したり、食べ物を持ち寄ったり、自分の持てる特技を提供することもある。基本的にはお茶を飲みながらリラックスした雰囲気でおしゃべりをし、イベントを楽しんだり、参加したりして楽しく過ごす居場所を提供することにある。また、体操やゲーム、スポーツなどの健康作りといったことも行われる。我が国の高齢者カフェ、認知症カフェでは上記の様な複数の役割をそれぞれのカフェの地域性、経営力、サポート力などに依存して様々混在して行われている。本学が開設する“来んさいカフェ：呉”では、看護高齢者カフェと認知症カフェを併設するのが特徴である。即ち、両カフェにおいて参加者の触れ合いの場、社会との繋がり場として役割は勿論であるが、高齢者カフェにおいては、看護師主導による参加者の健康調査、健康相談、活動量計導入によるエクササイズの介入によって健康増進、健康寿命の延伸を目指し、早期認知症者（MCI）の発掘を行うのが特徴である。健康調査では、排便、睡眠状態、精神的健康パターン、ストレス度（心理ストレス、社会ストレス、身体ストレス）、生きがい度、幸福度などの精神心理調査、認知機能チェックや血圧、Z・Tスコア音響骨評価骨評価、体内脂肪量・BMI、体部位別筋肉量、体水分量などの体組成のチェックおよび唾液中BDNF（Brain derived neurotrophic factor 脳由来神経栄養因子）という生物学的活性の測定を行う。本学部ではこれらの測定機器、測定技術を豊富に備えていることは他に例を見ない。このような指標によりエビデンス

表 I-3 高齢者カフェ まとめと課題

項目	記載日	内容
いつ	2016.12.03	病院だったら月1か？ 各シーズン、年に2回、年に1回の活動量計チェックでは？ 2～3ヶ月に認知症カフェと交互という手もありか？
どこで	2016.12.03	<ul style="list-style-type: none"> ・大学内の食堂を利用する（昼食をはさんだ時間にして喫茶を開けられないかなあ）→場所レンタル代をバスやタクシーの巡回にしてもらってきてもらいやすくする。 ・病院の一部を借りて活動量計を持って帰ってもらう方法もあり、その時に検査データを確認させていただくこともあり。病院にあるコーヒーショップの補助券にすればコンパクトで済むかも ・レンガ通りのアーケード街は人が来る可能性はあるかも、商店街の利用時に立ち寄りやすい ・グリグリ・コーヒーショップを利用する方法もあるかも ・阿賀市民センター（まちづくりセンター）だとイベントにしないと人は来ないかなあ ・阿賀プラザは難しいか・・1階の常設にしても人がいないか・・ボランティアに午前中だけ入ってもらって、大学は月一くらいで結果の説明か ・ゆめタウンだと若い人が多いから高齢者さんは平日の午前中がベスト ・広市民センター1階は図書館もあり、利用者は多いかも、ただ飲食はだめかも（最近は図書館にもコーヒー飲めるスペースはなあい？） ・近くのストア内でもよいかも、大学内でする時について食材なんかも並べてもらうか？
だれが	2016.12.03	<ul style="list-style-type: none"> ・地域のボランティアをしてくれる人を探す、無理すると続かない ・いろいろな職業経験を持つ人に参加してもらって教室を ・学生がスマホの扱い方を教えるというのもありか
何を	2016.12.03	<ul style="list-style-type: none"> ・大学の一部をカフェの畑に・・ ・ファッションデイの開催（おしゃれしてお出かけする日、オシャレをお披露目する日） ・大学なら体育館でトレーニング、体を動かすゲームがあるというんな世代が利用できるかも、祖父母と一緒に子供の子供の参加もOKにするなど ・ゲーム機器だから、男性だったらゴルフのCGなんかだとどうだろう・・お金がかかってしまうかなあ ・高齢者用の身体を動かすゲームの開発もありか ・癒しのスペース・・風呂は無理だけど、お化粧品教室、アロマ、お花、 ・レンガ通りだと、カフェを開催していない時には、地元のギャラリーとして開放・・幼稚園や小中高校や、地域の人の展示などのスペースにすると、いろいろな世代が、その人の家族や関係者がきてくれないかなあ・・もしかしてそれなら阿賀プラザでもできるか？ ・うちの大学の学生も、書道の展示とか・・特技を生かしたものや、作品を展示するとか ・認知症予防に効果の有ると科学的に実証されているものや成果をわかりやすく解説展示、体験型カフェか・・・ ・阿賀の文化を伝える（かん厳祭の船は阿賀で保管し阿賀から阿賀の人が宮島に運ぶよ、大太鼓をそれぞれの地区で守っているよ）
どのように	2016.12.02	<p>研究的にするには・・・人集め、広報、ニーズ</p> <p>うちのブランドは何？ 医療福祉カフェ・・・認知症予防のためのお立ち寄りカフェ、そのためのカフェモデルをつくる</p> <p>地域の人といかにつながるか</p>

（看護・「来んさいカフェ」高齢者グループ第1回ミーティング（2016年12月21日より）

に基づいた看護カフェモデルの構築を行う。

広島文化学園大学看護総合研究センター主催平成28年度市民公開講座は東京都健康長寿医療センター研究所 青柳幸利博士による「日常生活で継続できる健康づくり」ーガンや認知症など生活習慣病全般を病気別に予防するには？ーを行った。同研究所の長年にわたる研究成果をまとめた「健康長寿の10か条」からわかるのは、健康長寿の実現には“生活習慣の改善につきる”ということが主張されている⁸⁾。その中でも研究チームが注目したのは“足腰が丈夫である”という項目で、これ“高齢者における歩行能力の重要性”を示している。では歩行能力を高めるにはどうすれば良いのか、どれくらいの身体活動をすれば生活習慣の改善になり、病気を予防できるのかという客観的かつ具体的な数値は少なく、一般の方に分かりやすく伝えることができる客観的な指標が不足していた状況で、研究所チームは群馬県中之条町65歳以上全住民5,000人を対象に加速センサー付きの身体活動量計を配布し、15年間の長きにわたる1日活動時間と歩行能力の調査結果にもとづき開発した、がんや認知症など生活習慣病を病気別に予防する最適運動方法について非常に分かりやすい講演があった。呉市民に、こうした身体活動量を測定する企画に参加したいかというアンケート調査に対し、ほとんどの市民が参加したいとの回答があった⁹⁾。このような積極的な介入により各種疾病予防や介護予防に繋がることは、本事業を展開する上で大変参考になるものであった。

■ 連携

サロンやコミュニティカフェの実態調査から、その有効性と同時に持続可能なありかたについて様々な課題があることも見えてきた。地域と密着し、その資源を有効活用することが前提となるが、集客には多彩なイベントを実施する必要がある。そのためには、経済的資源とマンパワーが必要となる。高齢者カフェは大学施設を利用した地域密着型が望まれるが、継続性を持たせるには上記の課題を克服する必要がある。ひとつには既存のカフェ・サロンとネットワークを構築して連携していくことが大切である。訪問した宮原お茶の間サロン きらく亭には本学非常勤講師湯川和子氏が勤務されており、本学部高齢者カフェとの連携を快諾いただいている。

高齢者カフェの効果として、平成29年度から実施する健康意識調査や健康実態調査における研究結果のエビデンスを得ることにある。こうしたカフェによる事業の結果がどのような効果に結びついているかについては主観的な観察事象に留まり、客観的なエビデンスが得られていない現状がある。本事業ではエビデンスに基づいて看護カフェモデルを構築することを目的としている。

一方、こうしたカフェを実施するに当たり平成28年12月に行われた「対人援助研究推進」キックオフ・ミーティングにおける中村 正教授の基調講演の中で、こうした事業を展開するときに注意すべき点として、事業所があまりにも研究結果に固執するあまり、研究が全面に出てしまっは上手くいかないーというお話があったことが印象に残っている。あくまで参加者のための事業であって、参加者が楽しく過ごし、社会との交わりの中で喜びを感じ、また来たいという気持ちを醸成することを基調とすることを絶えず認識してはいてはいけない。

■ まとめ

広島文化学園大学「来んさいカフェ・呉」看護・高齢者カフェ開設に向けて既存の高齢者カフェの訪問調査、文献調査を行い、情報を収集した。高齢者カフェ（サロン）と名称されているものは、内容的には高齢者カフェと認知症カフェの性質を兼ねているものが多かった。得られた成果を以下に集約した。

1. カフェの効果について

カフェの効果について、高齢者カフェ（サロン）では、高齢者の居場所を提供し、孤立防止や引きこもりやうつなどの精神的抑制の改善、様々のイベントや会話を通した楽しい時間の共有、仲間作り、健康を増進することによる各種疾病の予防・認知症予防、介護防止の促進や社会参加・貢献による生きが

い感の達成などの成果が得られている。しかし、以下のような課題に直面している実態がある。

2. 課題

- ・地域のニーズの把握し、見合ったカフェが運営できているか。本当にカフェを必要としている対象者が参加しているか。
- ・様々なイベントを企画するには、多くのサポーターを必要とし、地域住民のサポーターとしての養成・参加を必要としている。
- ・安定した運営には、継続的な経済的基盤が必要。
- ・利用者が行きたいカフェを選択できる柔軟性が必要。
- ・こうしたカフェによる事業の結果がどのような効果に結びついているかについては主観的な観察事象に留まり、客観的なエビデンスが得られていない現状がある。

3. 看護・高齢者カフェの方向性

こうしたことを踏まえて、「来んさいカフェ：呉」看護・高齢者カフェの方向性をまとめた。

- ・地域性を重視したカフェとして大学に拠点を置き、地域へ出張する“出張型カフェ”を考慮する。
- ・看護学生の参加を特色として、学生教育、次世代サポーター養成、世代継承性を養う。
- ・高齢者の社会参加、達成感、生きがい間の充実を促進する。
- ・本事業により得られるエビデンスに基づいて看護・高齢者カフェモデルを構築する。

引用文献

- 1) 余錦芳, 松本真澄, 上野 淳 (2012); 多摩ニュータウン高齢者支援スペース・福祉亭の活動と利用の実態について, 日本建築学計画系論文集, 77 (671), p.9-p.18.
- 2) 河野理恵, 渋谷昌三, 小野寺敦子, 西川千登世 (2014); 高齢者のライフスタイルに関する研究 (1) —高齢者におけるライフスタイルタイプの検討—, 日本心理学会第78回大会
- 3) 讃井真理, 河野保子 (2014); 高齢者の Generativity における「関心」の特性, 及び高齢者の生活に及ぼす Generativity の検討, 看護学統合研究, 16 (1), p6-17.
- 4) 呉市社会福祉協議会 平成28年度事業計画 <http://kureshakyo.net/kureshakyo/>
- 5) 平成28年度版高齢社会白書 H27年度高齢化の状況及び高齢社会対策の実施状況 http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/zenbun/28pdf_index.html
- 6) 平成24年度厚生労働省 社会保障審議会 - 介護給付費分科会 第115回資料 http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000065682.
- 7) 認知症カフェのあり方と運営に関する調査研究事業 報告書 (2013); 平成24年度 老人保健事業推進費等補助金 老人保健増進等事業 認知症の人と家族の会
- 8) 青柳幸利 (2014); 高齢者の日常身体活動の特性と健康科学的解明 —身体活動量計を用いた中之条研究成果— in 特集 日常生活での体を動かす大切さ, KAO HEALTH CARE REPORT NO43.7.
- 9) 土肥敏博, 森田克也, 加藤重子, 迫田千加子, 佐藤敦子, 田村和恵, 前信由美 (2017). 看護総合研究センター公開講座報告. 2018年度看護総合研究センター年報.